第32回川柳マガジンクラブ東京句会

平成21年2月8日（日）

自由吟　評・鑑賞　松橋帆波

責任者気の持ちようでケセラセラ
導入から中七まで来て、この下五では残念。過去にも多く使われている言葉だけに新鮮味に欠ける。

年金崩壊老後移民増加
音字数は十七音なのだが、「年金崩壊」「老後」「移民増加」の言葉を並べただけになってしまった。全部漢字という思い切りは買えるが、五七五の定型はその形を持って意味を伝達する機能も持っているので、その辺も考慮したいところ。

いい国とほめて伸ばそう日本を
上五、中七、下五の流れが標語のようになってしまった。「現在のような経済状況の時こそ、日本を褒めてもいいのではないか」的ニュアンスを前面に出した方が良かったのでは。

年取ると出不精になり老い加速
上五と下五が同じ意味を持っているのが残念。「だからまた年をとっていく」と繋がっていけば面白いのだが、別の表現があれば比較してみたい。

誕生日祝う仲間の至福顔
自分の誕生日なのか、仲間の誕生日なのかが見えてこない。例えば「祝ってくれる至福顔」なら作者の誕生日。「祝ってあげる至福顔」なら仲間。尤もこれでは報告になってしまうが・・・。

太朗さん政治のオモチャ捨てなさい
句意は伝わるが、「政治はあなたのオモチャではない」「政治をオモチャにしないで欲しい」という言葉の助詞「は」「を」と、作品の「政治のオモチャ」の「の」から受ける印象の違いを比較検討してみたい。

押し花をセピア色した辞書が待つ
辞書が待っているのは、押し花が出来上がることなのか。その事象からの広がりを、読者がどう捕らえるのか、それぞれの意見を聞いてみたい。

アメリカの惑星が待つ春嵐
「春嵐を待つ」を「春一番・春の疾風」と理解すると、春を待っているということになるが、「惑星」が難解。アメリカ発の金融危機の影響を受けている世界の国々、もしくは同盟国などを指すのかどうか。

空席があちこち目立つ不況風
空席の目立つ場所が何処かが見えないのが残念。かといって、あまり具体的であれば状況の報告になってしまう。

ジャンボくじ当れば多分うろたえる
「確かにそうだな」という読者の同意・共感の先に行けているかどうか。この点を検証したい。

夢語る見つめる子どもの瞳の中で
子供の瞳の中にいるのは私なのだろう。そこに不思議な空間が生まれる。鏡の中の瞳の中に写る、どこまでも連続する像。素直に読めばいいのだが、この中八音は句の区切りが何処にあるのかを判り難くしている。

紅白の裏番組で老いて行く
「裏番組」をどう解釈するか。「裏番組で」と「裏番組と」と比較してみたい。同じこと考えていた僕と妻
下五の語順を変えてみた時に、作品の印象がどう変わるかを比較してみたい。

自分には真似の出来ない人が好き
「真似の」と「真似が」を比較検討したみたい。

木枯らしに春一番の噂聞く
木枯らしの擬人化と見るがどうか。「春はまだかい？」といったところか。

モンゴルの奇跡も見せられる国技
導入部から下五への流れがいい。並列させる言葉の選定の妙。「土俵」としてしまうとモンゴルが生きなくなる。

裏方で記念写真に縁がない
上五と下五の表現で言うとスタイルとしては古い形。その分安定感はあるが、パンチに乏

しいか。
買い替えをしたいテレビがよく映る
「地デジ」という時事と絡めると共感を得られるが、時事が絡まないと、買い換えたいという意思が個人的な都合となってしまう。そこがこのテーマの難しいところ。だからと言って詰め込むとくどくなってしまう。何を省略するのかを検証してみたい。
空の缶持ち帰ってもやはりゴミ
「裏方」の作品と比べると、下五に力がある。状況としてこの缶は飲料の缶ではないだろう。友達に松田聖子が一人いる
固有名詞を詠み込んだ作品は、その固有名詞が持つ力によって左右される。「松田聖子」は十分力を持つ固有名詞だと思うが、読者によって印象の差が出るかも。
不景気で買えぬ買わないから不況
定型を外れるが
「不景気で買えない　買えないから不況」
と比較し、外在律、内在律について検証してみたい。
又小言馬耳東風で日が暮れる
四字熟語の選定がいい。下五で日常を匂わせているので、句意が広がる。
没の句は一兵卒のように消え
没句と一兵卒とを並列にしているところが、面白さであると同時に、戦争の非情さを浮き上がらせる。何処にポイントを置くかで広がりが変わる作品。
功を焦るなと砥石の声がする
「砥石の声」という表現で、その状況を思い浮かべることができる。擬人法の妙。
ノーと言う準備で脚を組み換える
意識を表す言葉と、身体の動きを表す言葉の組み合わせの妙。心の状態と体の動きが見える作品。
人救う咄嗟の嘘を一ツ吐く
一読して病室の風景が浮かんだ。その後それだけではないだろうと鑑賞が広がっていく。
「咄嗟の嘘」という言葉の強さが効いている作品。
年経ても母の温みを捨てきれず
作者がご高齢だとすれば、深い作品。若い人だとしたら創り過ぎ。
皺寄ってからが人生忙しい
「からが」という部分が強い。限定しているようでいて、老後という人生が喚起されていく。そこに読者の共感が呼び込まれていく。
ありがとう短いような五十年
省略の妙。誰が誰に対して「ありがとう」と言っているのかを中七以降で推測させ、句の世界が広がって行く。

◎追記
外在律・内在律
五七五の定型俳句や五七五七七の定型短歌に対し音数にとらわれない主張、またはその作品を自由律という。その自由律の定義として、一句一律、内容に即した律を持つ、ということを内在律と呼ぶ。それに対応する言葉が外在律。即ち五七五、五七五七七の定型をいう。

・不景気で買えぬ買わないから不況
は定型。即ち外在律を有する。
・不景気で買えない　買えないから不況
は前半の九音と後半の九音が一字開けによって鏡像をなしている。これによって内在律を有している。